

空くう

長岡紫

母のような空そらは

雨という涙と 太陽という笑みを湛え

「忘れてごらん」と言う

懐かしさの中で

深い慈しみの香に包まれて

ふと我に返れば

心に刺さった

トゲの痛みが和らいで

空はもっとと広くなっていた